

徳大病院、8診療科が連携

唇や顎、口蓋が裂けた状態で生まれる先天性の病気の口唇裂・口蓋裂一。患者は複数回の手術を受けたり、症状に応じて言語聴覚士によるトレーニングが必要になったりと治療は多岐にわたる。徳島大病院では産婦人科や形成外科、歯科・口腔外科な

ど8診療科が連携した四国で唯一となる口唇口蓋裂センターを2019年度に設け、妊娠時からのケアや出産後の超早期治療に取り組んでいる。質の高い包括的な治療を提供することで、保護者や患者の不安解消につながっている。



【上】生後間もない口唇裂・口蓋裂の患者【下】生後5時間でホッツ床と口唇テープを使用し、生後3カ月で口唇形成術を行った12カ月の患者（上下の写真は同一人物）

口唇裂・口蓋裂の患者は約550人に1人と言われ、県内でも年間10人ほどが生まれており、産前にエコーを使った健診で判明するケースが多い。

初期段階の治療には、口の中に入れる「ホッツ床」と呼ばれる装置を使う。唇などの裂け目に舌が入って広がるのを防ぐとともに、鼻の形のゆがみを抑える装置で、早期に装着することで治療の効果

がより高まるとされている。

口唇口蓋裂センターでは、産科や新生児室の医師らが出産予定時期などの情報を共有。産前に形成外科医がホッツ床についてインフォームドコンセント（十分な説明と同意）を取っておく。

産後30分ほどでスキャナーを用いて口腔内の3D写真を撮影し、その画像を基に3Dプリンターで口腔内の模型を制作。それに合わせて歯科技工士がホッツ床を作

口唇裂・口蓋裂 出産前からケア

最速で生後約4時間、遅くとも生後24時間以内にはホッツ床を装着でき、世界でも類を見ない早さとなっている。

その後、生後3カ月で口唇形成術、1歳で口蓋形成術を行う。それまでに裂け目の幅を狭めることができれば、上顎の成長への影響が少ない手術法を選択できるよ

質高い包括的な治療提供

になるため、センターでは超早期のホッツ床の装着に力を入れている。



口腔内の模型に合わせて作ったホッツ床（ピンク色）

県北部に住む30代女性は、妊娠6カ月の時に子どもが口唇裂であるとの診断を受けた。治療などの見通しが立たず不安だったが、センターを紹介されて産前に形成外科医に治療の全体の流れを聞き、安心したという。

子どもは2歳になり、おしゃべりや歌が好きな元気な子に育っている。「ホッツ床の装着や裂け目を寄せるためのテープの貼り替えは大変だったが、おかげで治療も順調。センターの体制が整っているのが、前向きに取り組めている」と話す。

センター長を務める橋本一郎教授は「強固なチーム連携医療により、ほぼ全ての症例できれいな手術ができています」とし、「常に勉強会を実施するなどして情報をアップデートしており、個々の患者に応じた最適な治療を提供している」と話した。

（佐藤聡美）